

## 神さま？ と空と

### 神 沢 利 子

わたしが子どもだった頃、世の中には不思議が満ち満ちていたけれど、空は何といっても不思議の最たるものであった。

青空から曇り空のなまり色に変わり、また夕焼けの真紅に燃える空は、夜には宝石のような星をちりばめ、ある時は呆れるほど沢山の雨をふらせ、雪をふらせるのだったから。

太陽というわたしたちの手に触れることのできない、そのくせ、それなくては生きられない存在があつて、空と神とはわたしたち人間の中に深く結びついたのかもしれないが、幼い子どもにとつておとなからきく神さまはひどく奇妙なものであつた。

そして、わたしは紛れもなく日本人の子どもであつたために、神さまというものが絶対唯一のものとしてではなく、多種多様に捕えられた。まずは雨をふらせ雪をふらせるのはだれかという間に、母は神さまですよと、一番やさしい答えで答へ、兄は雪はともかく、雨をふらせるのは雷にきまつてる

というのだった。たしかに太鼓をかつき、黒雲にのつて空を駆けまわる雷さまは絵本でもおなじみであつたが、神さまの姿は描けなかつた。

「どんなことをしても神さまはちゃんと空から見えていらっしやいます」といわれる時、神さまはまるで透明人間のスパイのようであつた。神さまはそのようにのつべら棒の顔をしていた。困ったことに家の神棚の上にも神さまはいるらしく、また、赤い鳥居のお社にもいるらしかつた。教会を知つたのはいづいぶん大きくなってからだけれど、イエスという神さまの子どもの話は、十二月になるとクリスマスと一緒に行ふ絵本や雑誌で語られたから、西洋人の神さまがいることだつて知つていた。

そして、それらの神さまは地にいるかと思つと、みな空にいるようでもあつた。

その他にも神さまはいた。タカマガハラというところは天にあり、そこに天皇のご先祖だという神さまがいられた。その上、死んだひとがいくという天国も空にあるらしかつたから、空はどんなに広くともさまさまな神さまと死人が雑居していて、わたしはただ混乱するだけであつた。

そうして澄み切つた空をいくら仰いでも、雷さまも翼のは

えた天使も、イザナミたちが立った天の浮橋も何ひとつ見えはしなかった。時々、まぼろしの神の衣のような白い薄雲がとんでいくだけであった。

わたしはりんごの木にのぼったり、木の下にねころんだりしては、あかずに空を眺めた。空はあんなに大雨をふらせるのだから、きつと大きな湖があるのだ。だから、あんなに青いのだろうと思ったりした。

ところで、空はただ、自分のあたまの上にあるものと信じていたのに、そうではない。わたしの住む大地も海も地球という球の一部で、それがこの大空をくるりくるり回転しながら浮かんでいるという。

兄の語る地動説こそ、わたしをまたもや不安と混乱に陥し入れるものであった。

それならばなぜわたしたちは回る地球から滑り落ちないのだろう。わたしたちは大地に立っているはずなのに、反対に大地にぶら下がっているのかもしれない。そうして、そんなことが今までなかったにも関わらず、いつ、大地震のように山や町が崩れ、滑り落ちるかという不安がわたしの心を落着かなくさせた。そうして、地球が空に浮かんでいるものである以上、わたしたちが墜落していくのは空のただなかの

筈であった。

空を仰ぎ、夜空の星を仰ぐ時のあのいわれない恐怖はおとなになってもこのこっぴいて、空に墜落するのではないかと、目まいに似た感情は今もしばしばわたしを襲う。

はじめて飛行機にのったのは、ここ五、六年程前のことで、踵が地から離れることに原始的な恐怖があった。しかし、何ということはなく雲海をどぶ時、十何年前にかいた童話の、天の雪原を疾走するトナカイの橋と、黒衣の老婆のそのイメージが寸分違わぬ風景でくりひろげられた。天の雪原よ雲海であり、またはるかオホーツクの流水の海に似ていた。

わたしの人生という現実は大地に否応なく縛られている。肉身から煩わしい世の慣いのすべてから、がんじがらめに縛られ、飛翔を許さず空を仰ぐ囚人のようだ……。

樹木の根が地の下の暗く陰湿な土中から、さまざまの生物の腐肉や腐葉土からその精を吸いあげ樹液は矢のように梢めざしてのぼっていく、大地に縛られ、大地を緊めつけながら天を仰ぎ、天をひたすら指す樹木のところがわたしにはいい。空とは、天とはむかしも今もわたしにとって何なのであらう。

(児童文学者)